

手を上げて祝福された
——主イエスの昇天

ルカ 24 : 50 - 51



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年5月29日
復活節第7主日（昇天後主日）

京都聖三一教会にて

今日の福音書はこのように始まっていました。最後の晩餐の席での主イエスの祈りです。

「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。」ヨハネ 17:20

イエスはわたしたちのために祈ってくださる。最初の弟子たちのためだけではなく、「彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも」、つまり後の弟子であるわたしたちのためにも、イエスは祈ってくださることを知らされます。わたしたちはイエスの祈りによって支えられています。

ところで今日は昇天後主日。3日前の木曜日は、主イエスが天に上げられたことを記念する昇天日でした。それで今日は主イエスの昇天のことをお話したいと思います。

使徒言行録によれば、イエスは復活された後、40日にわたって何度も弟子たちに現れて、ご自分が生きていることを示されました。こうして時が満ちて、イエスは天に上げられます。

ルカによる福音書の最後の方を読みましょう。

「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。」ルカ 24:50-51

特に 50 節に目を留めてみましょう。

「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、

手を上げて祝福された。」

ここでイエスは何をなされたか。3つの動詞で表現されています。「(弟子たちを)連れて行き」「手を上げて」「祝福された」。一つずつ確かめてみましょう。

まず第1に、イエスは弟子たちを「連れて行かれた」。どこへかということ「**ベタニアの辺りまで**」です。「辺りまで」というと少し曖昧ですが、使徒言行録を見ると、「**オリーブ畑と呼ばれる山**」(1:12)と書いてあります。つまりイエスは弟子たちをオリーブ山に連れて行かれたのです。

そのオリーブ山の西側の麓にゲツセマネと呼ばれる所があります。そこはエルサレム滞在中のイエスの祈りの場所でした。あの夜、40日と少し前のあの夜、イエスはそこで苦しんで祈っておられました。やがて^{つるぎ}剣や棒を持った(マルコ 14:43)人々がやって来てイエスを捕らえました。弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げ去りました。そのオリーブ山です。

弟子たちにとってそこは悲しみの記憶の場所。そしてイエスを見捨てた負い目を感じるつらい場所でした。そこへイエスは弟子たちを連れて行かれました。それは、悲しく辛いことを思い出させて弟子たちを苦しめるためではなく、そこを喜びの場所、弟子たちの再出発の場所とするためです。このオリーブ山で、今、弟子たちは新しい経験を与えられようとしています。

第 2 に、昇天に際してイエスは弟子たちに向かって「手を上げ」られました。その手は、あの夜、弟子たちの足を洗ってくださった手です。その手はかつて幼い子どもたちを抱き上げて祝福された優しい手です。同時にその手は、十字架で釘打たれた手です。その手は愛の手。愛のゆえに人を支え、愛のゆえに傷つかれた手です。今、上げられた手から、イエスの愛が弟子たちに伝わってきます。

ところでこの「手」をギリシア語原典で確かめると、複数になっています。つまり両手です。わたしがそれに気づいたのは今から 10 年あまり前、この聖三一教会の牧師であった時です。

話が少しそれますが、わたしはこの教会、この礼拝堂で、大切な経験をさせていただきました。ある日の朝、ここで黙想していたとき、ふと「三一」「三位一体」という言葉とともに喜びが起きました。朝の光の中で、三位一体が輝いたとでも言いましょうか。この教会の名前、「三一」「三位一体」ということがむつかしい理屈ではなく、恵みの神に対する喜びと賛美の表現であることを感じたのです。

古代の教会指導者の中にアタナシオスという人がいます。教会の中に三位一体の信仰を確立したと言われる熱烈な主教です。

その朝の経験から、当時わたしも「熱烈三位一体」になっていて、ある方の病床洗礼をしたとき、「アタナシオ」という名前を付けました。アタナシオK.M.さん。2006年、今から16年前の5月下旬でした。アタナシオはオタナシオスの聖公会式の読み方です。

話を戻します。主イエスの昇天の場面です。

イエスは弟子たちをオリーブ山に連れて行き、そして弟子たちに向かって両手を上げられました。片手で合図をされたのではなく、両の手にイエスは全身の思いをこめて弟子たちを祝福されました。3つ目の動詞、「祝福された」です。

「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。」ルカ 24:50-51

「祝福された」「祝福しながら」と、「祝福」が繰り返されています。強調です。イエスが弟子たちを祝福されたことが強調されているのです。

昇天に際してイエスがなされたことについて、三つのことを確かめました。(1) 弟子たちをオリーブ山に連れて行き、(2) 両手を上げ、(3) 祝福された。この三つです。そのとき、弟子たちに何か起こったのでしょうか。

弟子たちにイエスの愛が伝わってきます。イエスの両手から祝福が伝わってきて心に熱いものが起こり、喜びが湧き上がります。弟子たちはじっとイエスの姿とその両手を見つめています。弟子たちの目と心に、イエスの祝福の手が刻印されます。こうして、悲しみの記憶の場所であったオリーブ山は、喜びの記憶の場所となったのです。

ここまで最初の弟子たちが経験した主イエスの昇天の出来事を見つめたのですが、大事にしたいことがあります。それは、イエスは最初の弟子たちだけではなく、後の弟子であるわたしたちをも祝福してくださる、ということです。今日最初にヨハネ福音書から、イエスが後の弟子たち、つまりわたしたちのために祈ってくださったことを知ったのですが、祝福も同じです。イエスはわたしたちに向かって両手を上げてわたしたちを祝福してくださるのです。

使徒言行録には昇天の場面の続きがこう書かれています。

「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に

上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。』使徒言行録 1:9-11

弟子たちはずっと、離れて行かれるイエスを見つめていました。祝福の手と姿を見つめていました。すると「白い服を着た二人の人がそばに立って」彼らに言いました。

「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。」

あなたがたには使命がある。あなたがたが受けた祝福を周りに、世界に広げていきなさい。再びイエスが来られるのを信じて、待ち望んで、地上ですべきことを行いなさい——これがわたしたちに呼びかけられている促しです。

お祈りします。

主イエスさま、あなたは天に上げられるとき、弟子たちを祝福されました。どうかその祝福をわたしたちにも注いでください。わたしたちが忘れないように、あなたの祝福の手をわたしたちの心に刻印してください。そうして、わたしたちが地上で生きてなすべきことをなさせてください。アーメン